



海外研修

鹿児島大学国際協力農業体験講座

—東南アジアファームステイ—

津田 勝男

鹿児島大学農学部

キーワード：国際協力、国際交流、農業、国際感覚、実地研修、国際ボランティア

1. 実施母体

本講座は1999年に鹿児島大学の共通教育科目として開始した。共通教育科目としたのは、鹿児島大学の全学部の学生を対象として実施するためである。11年目となる2009年からは、農学部の専門科目として「国際協力農業体験講座-東南アジアファームステイ」を新たに立ち上げ、従来の共通教育科目は科目名を「国際協力体験講座-東南アジアファームステイ」に変更した。また、大学院学生を受け入れるために、農学研究科に「国際協力農業体験講座特論」を設けた。

このように教育カリキュラムを変更した狙いは、先ず共通教育科目を受講したうえで、再受講の機会として農学部専門科目を受講し、さらに大学院科目を受講させることにある。なお、2回目の受講に際しては原則として1回目とは異なる渡航先を選択させている。

担当教員は、現地研修の引率を務めるとともに本講座全体の運営について協議する。本講座の趣旨に賛同する者であれば誰でも参加できることになっているが、現在(2012年度)は農学部教職員しか参加していない。ただし、これまで他学部の教職員に参加を呼びかけたことはないので、積極的な呼びかけを行えば賛同者は増えると考えられる。ちなみに2012年12月現在の担当教職員数は18名である。

2. 相手先

本講座では、ミャンマー連邦共和国、タイ王国、ベトナム社会主義共和国の3カ国を渡航先としている。

ミャンマー連邦共和国では、「NPO法人 地球市民の会」の協力を得て、当会が運営している「タンボジ研修センター」や「ナウカ村落開発センター」を拠点としてシャン州インレー湖周辺地域を中心に研修を行っている。タイ王国では北タイのパヤオ県にある「21世紀農場」を受入先として研修を行うとともに鹿児島大学との交流協定校であるチェンマイの「メジョー大学」で研修を行っている。ベトナム社会主義共和国では「NPO法人 Seed to Table」、「ベトナム社会科学院」を受入先として研修を行っている。内容については次項で紹介する。

3. 期間および内容

渡航研修は、鹿児島大学の夏季休業期間である8月または9月に10~11日間の日程で行っている。内容について渡航先ごとに記す。

1) ミャンマー連邦共和国

「タンボジ研修センター」は、1999年に財団法人カラモジアによって設立された施設で、就学が困難な青少

年を研修生として受け入れて、高校に通わせるとともに施設内で循環型農業を実践している。2003年にNPO法人 地球市民の会に移管されたが、基本的な運営方針は変わっていない。本講座の受講生は渡航研修の前半3泊4日を当施設で過ごし、朝晩は研修生とともに圃場や家畜の管理をするとともに土着菌堆肥の作成や木酢液の採取などの農作業実習を体験する。研修生達は受講生達から見ると年下であるが、受講生達に対する心遣いや勉学に対する意欲を目の当たりにして大きな刺激を受ける。また、インレー湖およびその周辺地域を訪問して農業問題や環境問題の現状を実感させている。後半は「ナウンカ村落開発センター」を拠点として日中だけ周辺の村に滞在する「ホームビジット」を実施している。受講生は1人ずつそれぞれの受入れ家庭に滞在するが、当地で使われている言語はシャン語で、英語はもちろんのことミャンマー語でも通じない場合が多い。受講生は言語以外の方法でコミュニケーションをとろうと努力することを通じて、心の交流が出来るようになる。また決して裕福とは言えない受入れ家族から過分のもてなしを受けることによって、心の豊さを感じるようになる。

2) タイ王国

「21世紀農場」は故谷口巳三郎氏(2011年逝去)によってパヤオ県サクロー村に設立された農場である。1999年から2011年までのタイ王国における研修は、「谷口巳三郎氏の生き方を学ぶ研修」と言っても過言ではない。谷口氏の経歴¹⁾などはここでは省略するが、受講生は谷口氏の活動を通して北タイが抱える、山岳民族、エイズ、貧困、森林破壊といった問題を知り、それらの問題に取り組むボランティア活動の在り方を考えることになる。谷口氏の活動の一環としてエイズ患者の救済がある²⁾。谷口氏が支援するエイズセンターを訪問してエイズ患者や支援者の話を聞くが、このような機会は日本で設定することは困難であり、受講生達に大きな刺激を与えている。本講座の受講を希望する理由としてエイズセンターを挙げる者も居る。また、谷口氏の他、山岳民族寮「暁の家」を運営する中野穂積氏を始め、堆肥工場「ゆい」の池松政敏氏、富士農園精米所を経営する梶八十二氏(2008年逝去)や現地に派遣されていた青年海外協力隊員の話聞く場を設け、「現地で活躍する日本人」を通じた国際協力の在り方を学ばせている。一方、メジョー大学については、当初は表敬訪問と施設見学程度の交流であったが、2009年度の森林再生ロイヤルプロジェクトへの参加を契機に2011年度

からはメジョー大学内での研修を充実してメジョー大学生と交流しながらの農作業体験などを実施している。これらは同年代の学生との交流を通じて国際協力の在り方を考える機会になっている。

3) ベトナム社会主義共和国

「Seed to Table」のプロジェクトサイトにおいてベトナム在来品種の復元や有機農業に取り組んでいる農家や団体を訪問する。また、ベトナム社会科学院やナムディン日本語学院などを訪問して日本語や日本文化を学ぶ学生と交流する。

それぞれの渡航先について希望者の数が4名を超えた場合に渡航研修を実施することとしている。受講生4名であっても引率教職員は2名を配置する。また、2名のうち1名は引率経験者を充てるように配慮している。

4. 事前・事後の教育

本講座の受講を希望する学生は先ず、受講希望書を提出する。これには受講を希望する理由を記入する欄があるが、この時点での学生の動機は様々である。事前の教育として事前講義および事前宿泊研修、アジア言語講座を実施する。この段階で「渡航を前にして」と題する中間レポートを提出させる。さらに渡航研修を終えた後の事後教育として帰国報告会の開催とレポートの提出を義務付けている。以下にそれぞれの内容と狙いを記す。

1) 事前講義

本講座では農村や農業関係機関を訪れることが多い。そこでそれぞれの国や地域が抱える問題などを学ぶことになるが、その前に日本の農業についての現状を把握していなければ渡航先の農業を理解することは難しい。このため、「現代日本の食料・農業事情」という講義を受講させる。この講義は農業経済学を専門とする教員が担当している。

また、受講生のほとんどが海外への渡航は初めてであり、さらに必ずしも施設が整備されていない農村部での生活が主になることから、「海外研修の心得」という講義を受講させる。また、この講義ではODAなど国が行う国際協力とNPOなど民間が行う国際協力の違いについても理解させる。この講義は、青年海外協力隊の経験を有し現在も国際協力に関与している教員が担当している。

さらに、東南アジアの渡航先で交流する人々の生活

や考え方に大きな影響を与えている宗教、特に仏教についての理解を深めるために南泉院の宮下亮善和尚を非常勤講師として「国際協力の精神」と言う講義をお願いしている。

また、渡航先での安全の確保および衛生面での注意を喚起するために蚊が媒介するマラリアとデング熱の予防対策や消化器系疾病の予防対策などの指導を行っている。

2) 事前宿泊研修

本講座では農家を訪問し、滞在する機会が多い。農村・農家の暮らしを体験するが、受講生の大半が非農家であることから、予め日本の農村・農家の暮らしを体験させることにより渡航先と日本の違いあるいは共通点を認識させる必要がある。また、受入れ農家の方々から話を聞くことにより日本の農村・農家をより深く理解することも出来る。なお、本研修は鹿児島県内の霧島市溝辺町竹子の方々を受入れをお願いしているが、受入れ農家の1人であるとともに本講座の創始者でもある萬田正治氏(鹿児島大学名誉教授)には事前講義をお願いしている。

3) アジア言語講座

訪問先での説明や意見交換については、通訳をしてくれる方が対応してくれるが、その他日常生活では直接の会話が必要になる場面が多い。また、緊急の場合は自分の状況を正確に伝えて助けを求める必要がある。受講生は会話のための本、例えば「旅の指さし会話帳」(情報センター出版局)を持参するが、実際の発音やアクセントは文面だけでは修得できない。このため、留学生を非常勤講師として、「アジア言語講座」を開講している。この講座の授業目標には、(1)挨拶と自己紹介が出来る。(2)自分の感情(感謝あるいは怒り)と現在の状況を表現できる。(3)相手が何を考えているかある程度は理解できる。の3点を挙げている。

4) 中間レポートの提出

以上の事前講義および事前宿泊研修、アジア言語講座を終えた時点で、受講生には「渡航を前にしての抱負」と題する中間レポートを提出させている。字数は1000~1500字程度の短いレポートであるが、受講生がそれぞれ想定している渡航目的あるいは到達目標を再認識させている。

5) 帰国報告会

帰国して約1カ月後に学内関係者を対象にした学内向け帰国報告会と事前宿泊研修の受入れ農家を対象とした帰国報告会を開催している。帰国報告会では各コースが渡航先で見聞きして考えたことを発表するが、それぞれがテーマを設けて再三の話し合いを行っている。

6) 事後講義

前述の学内向け帰国報告会の際には、熊本れんげ農苑の平野喜幸氏を非常勤講師として事後講義を行っている。

7) レポートの執筆

受講生には帰国1カ月~1カ月半後を目途にレポートを提出させ、これらを編集してレポート集を出版している。レポートは単なる旅行日記にとどまらず、渡航先で受けた感動および将来に向けての熱い思いが綴られている。レポートを執筆することによって、渡航先で見聞したことを確認するとともに関連事項を調べることによる再認識をはかっている。また、同じ渡航先のメンバーはもちろんのこと他の渡航先の受講生がまとめたレポートを読むことによって、国際協力についての理解が深まることが期待される。

5. 経費について

本講座の運営経費は引率教員の旅費とレポート集の出版に係る印刷製本費、事前講義およびアジア言語講座の講師謝金、現地でのバス借上げ費用の一部負担などである。これらの経費は教育センター経費と農学部経費で、およそ半分ずつをまかなっている。

一方、受講生の渡航費用は2009年度までは全額自己負担であったが、2010年度と2011年度は学長裁量経費による「学生海外研修支援事業」により1人当たり7万円の支給と海外旅行保険への加入の支援を受けることが出来た。2012年度は日本学生支援機構の「留学生支援交流支援制度(ショートステイ、ショートビジット)プログラム」の認可を受け、1人当たり8万円の支援を受けた。

6. 学生への効果

本プログラムは基本的には農林業を通じた国際協力を学ぶものである。訪問先は農林業関係の機関や施設が多いが、教育施設や医療機関、寺院を訪問して現地の人々の考え方を理解することによって国際協力およ

び国際交流の基本的精神を学ぶことが出来るように計画している。渡航中は原則として毎日、ミーティングを行っている。ミーティングでは各人がその日の出来事を振り返って感想や意見、疑問点などを発表するが、お互いの観点の違いや感じ方の深さを知る機会となり、大きな刺激を受けている。また人前で発表することは、思考を整理する訓練になるとともに積極性を高めるきっかけにもなっている。

渡航研修を終えた後に帰国報告会を実施することにより、各コースの違いと共通点を認識するとともに日本の実情を含めての総合的な考察をすることができるようになっている。

【タイコース】

2012年度の行程(表1)を例にすると、前半は「21世紀農場」を拠点として、地元ホンヒン地区のホームステ

イ、エイズセンター訪問など、後半はメジョー大学内での農業実習などにより農民および学生などと交流を行った。ホームステイではタイ北部の農家の生活を実感することができた。エイズセンターでは困窮しても互いに助け合う人たちから生の意見を聞くことができた。山岳民族寮「暁の家」ではタイにおける山岳民族が抱える問題とその問題に取り組んでいる中野穂積さんの活動を通して国際協力のあり方を考えることができた。メジョー大学では同年代の学生と農作業をしながら交流することができた。受講生はタイでの異文化体験により、さまざまな事象に興味を抱くとともに、自分たちの母国を外部から相対化して見る視点を学んだ。本講座に参加して受講生は「現地に行かなければ分からない」という思いを強くしたようである。

表1 2012年度タイコース行程(2012年8月17日～8月27日)

日 曜	午前	午後	夜
17 金	9:30 福岡空港集合 11:35 バンコク行き(TG649便)	14:55 バンコク着 18:20 チェンライ行き(TG140便)	19:40 チェンライ着 Diamond Park Inn泊
18 土	21世紀農場へ移動 21世紀農場オリエンテーション カニタ赤塚氏レクチャー 中島美樹氏レクチャー	赤塚順氏レクチャー タイ料理・デザート作り	21世紀農場職員との交流会 ミーティング 21世紀農場泊
19 日	農作業実習(田植え)	農作業実習(ウコン苗定植、グアバ袋カケ、グアバ・野菜苗作り) ホンヒン村へ移動	受入れ農家との対面式 受入れ農家泊
20 月	受入れ農家で農作業	受入れ農家で農作業	ホンヒン村民との交流会 受入れ農家泊
21 火	朝市見学 プサン郡へ移動 プサン郡エイズセンター訪問 プサン滝国立公園へ移動	プサン森林公園でレクチャー	21世紀農場職員との交流会 ミーティング 21世紀農場泊
22 水	モン族村へ移動 モン族村見学 チェンセーン港見学	ゴールデントライアングル見学 メーサイ市場見学 チェンライへ移動	チェンライナイトバザール見学 Diamond Park Inn泊
23 木	サハサスクサスクール訪問	山岳民族寮「暁の家」訪問 チェンマイへ移動	ミーティング メジョー大学内ホテル泊
24 金	メジョー大学副学長表敬訪問 メジョー大学内研修 (ラン増殖センター見学)	メジョー大学内研修 (農場・施設等見学、田植え・ 稲刈り・脱穀等体験)	メジョー大学生との交流会 ミーティング メジョー大学内ホテル泊
25 土	メジョー大学内研修 (キノコ類培養施設見学)	メジョー大学内研修 (ラン増殖)	メジョー大学生との交流会 メジョー大学内ホテル泊
26 日	シリキット王女植物園見学	チェンマイ市内寺院見学 チェンマイ市場見学	チェンマイナイトバザール見学 20:50 バンコク行き(TG121便) 22:10 バンコク着
27 月	0:50 福岡行き(TG648便) 8:00 福岡着 解散		

※斜体時刻はタイ現地時間(日本-2時間)。

【ベトナム】

2012年度の行程(表2)を例にすると、2012年度はホーチミン市を中心とした南ベトナムとハノイ市を中心とした北ベトナムを周って両者の風土や生活の違いを実感した。

南ベトナムではNPO「Seed to table」の伊能まゆ代表の指導で有機農業に取り組んでいる農家を訪ねた。豊かな穀倉地帯における取組みにはある種の「おおらかさ」を感じた。後半は北ベトナムの農家を訪ねたが、北ベトナムでは生産者グループを組織したり水田の生きもの調査を実施するなど真摯な取り組みが見られたこと

により、同じ国内での違いを実感することができた。どちらの地域でも現地の人々による細やか心遣いを実感し、勉学に対する意欲とともに人に対する思いやりの心を学んだと思われる。とくに、現地で活動する伊能代表の国際協力に対する姿勢や考えに受講生は大きな刺激を受けた。

【ミャンマー】

2012年度の行程を表3に示した。前半はタンボジ研修センターにおいて現地の寮生と生活をともにすることで彼らの勉学に対する熱意と細やかな心遣いに感動していた。また受講生は自分達が恵まれた勉学環境にあ

表2 2012年度ベトナムコース行程(2012年9月2日～9月12日)

日 曜	午前	午後	夜
2 日	13:30 鹿児島空港集合 15:55 ソウル行 (KE786 便)	17:30 ソウル着	18:55 ハノイ行 (KE683 便) 22:05 ホーチミン着 Hong Vy Hotel 泊
3 月	ベンチュエ省ビンダイ郡へ移動	タインフック村へ移動 アヒル農家、エビ養殖農家と交流	ミーティング Khach San 33 泊
4 火	ロンホア村へ移動 農作業体験 (トウモロコシ、トウガラシ収穫) 減農薬ロンガン栽培見学 ロンホア村民と昼食	チョウフン村へ移動 輸出用コメ農家と交流	ミーティング Khach San 33 泊
5 水	フーロン村へ移動 有機野菜生産者グループと交流 フーロン村民とパインセオづくり フーロン村民と昼食	ベンチュエ省へ移動 ベンチュエ省農漁業普及センター訪問	ミーティング Ham Luong Hotel 泊
6 木	カントー市へ移動 ターロン稲作研究所訪問	カントー大学訪問 (国際協力局、農学科)	カントー大学生と夕食兼交流 ミーティング Can Tho Hotel 泊
7 金	水上マーケット見学 ホーチミン市へ移動	ツーズー病院訪問 (ドク君らと交流) ホーチミン空港へ移動 17:30 ハノイ行き (VN1148 便) 19:30 ハノイ着	ミーティング Golden Legend Hotel 泊
8 土	有機農産物市場訪問 フェアトレード店訪問	麺作り作業所見学 伊能まゆさんと意見交換	ミーティング Golden Legend Hotel 泊
9 日	ホアビン省タンラック郡へ移動	ナムソン村へ移動 青年団と水田生き物調査	ナムソン村民との交流会 ナムソン村集会所泊
10 月	ディックザオ村へ移動 有機野菜・豚生産者と交流 ディックザオ村民と昼食	ハノイへ移動	ミーティング Golden Legend Hotel 泊
11 火	ハノイ国家大学訪問	ベトナム社会科学院訪問 ハノイ市内市場見学	ハノイ空港へ移動 23:35 ソウル行 (KE680 便)
12 水	5:50 ソウル着 9:30 鹿児島行 (KE785 便) 11:05 鹿児島着		

※ベトナムと日本の時差は2時間(日本-2時間)。

表3 2012年度ミャンマーコース行程 (2012年9月10日～9月20日)

日 曜	午前	午後	夜
10 月	9:30 福岡空港集合 11:35 バンコク行き (TG649 便)	14:55 バンコク着 17:50 ヤンゴンイ行き (TG305 便)	18:45 ヤンゴン着 Seasons of Yangon Airport Hotel 泊
11 火	10:30 ヘーホー行 (W9119 便) 11:40 ヘーホー着	タンボジ研修センターへ移動 オリエンテーション	研修センター寮生との交流会 ミーティング タンボジ研修センター泊
12 水	農場実習 (日常朝管理) 柴田京子氏レクチャー 研修センター内見学	農場実習 (土着菌堆肥) タンボジ村見学 シュエタンウー僧院訪問	井倉洋二先生レクチャー ミーティング タンボジ研修センター泊
13 木	農場実習 (日常朝管理) インレー湖水上農業視察 ファウンドーウー寺院訪問 カンカウン准中学校訪問	農場実習 (木酢液調製)	研修センター寮生との意見交換 ミーティング タンボジ研修センター泊
14 金	農場実習 (日常朝管理) メインタク孤児院訪問	メインタク村訪問 水草堆肥プロジェクト見学	研修センター寮生との交流会 ミーティング タンボジ研修センター泊
15 土	農場実習 (日常朝管理) ナウンカ村へ移動	ナウンカ村落開発センター見学 植林実習	大島先生レクチャー ミーティング ナウンカ村落開発センター泊
16 日	ナウンカ市場見学 ニャウンカッ村ホームビジット	ニャウンカッ村ホームビジット	ナウンカセンター研修生と交流 ミーティング ナウンカ村落開発センター泊
17 月	カックー寺院見学 ナウンシンデモファーム見学	ハムシー寮見学	ナウンカセンター研修生と交流 ミーティング タウンジー市内泊
18 火	ニャウンカッ村ホームビジット ティハムスエ村へ移動	ティハムスエ瞑想センター訪問 セヤドー説法拝聴、瞑想体験	ミーティング タウンジー Duwun モーテル泊
19 水	ヘーホー空港へ移動 10:10 ヤンゴン行 (W9011 便) 11:30 ヤンゴン着	NGO スイダナーとの意見交換 ヤンゴン市内市場見学 シェダゴン寺院見学	19:45 バンコク行き (TG306 便) 21:40 バンコク着
20 木	0:50 福岡行き (TG648 便) 8:00 福岡着 解散		

※斜体時刻はミャンマー現地時間 (日本-2.5時間)。ただしバンコクはタイ現地時間。

ることをあらためて実感し、今後の勉学意欲を強くした。同時に他者に対する思いやりの心の大切さを学んだ。後半はニャウンカッ村におけるホームビジットによって、「物の豊かさ」と「心の豊かさ」の差異を実感した。村人の行動様式には仏教の教えが強く影響しているが、ミャンマーの仏教についても多くのことを学んだ。また、現地で活動しているNPO法人「地球市民の会」のプロジェクトマネージャー柴田京子さんの話や行動を通して、地域の実情に根ざした国際協力のあり方を学ぶことができた。

本プログラムを受講した学生は元々、好奇心旺盛で積極的な資質を有していると考えられるが、相手を理

解するためには相手の中に入り、コミュニケーションを取ることが大切であり、現地に出向いての研修を通してより積極的に質問するようになった。各自の役割分担を全うし、何事にも興味を示し、相手のことを思いやり、積極的に行動することが出来るようになったことが一番の成果と考えられる。

7. 研修から得られた教訓、注意事項など

前述した通り、引率教員は以前に渡航した経験を持ち、渡航先でどのような研修が行われるか、受講生がどのような体験をするかもある程度は把握している。

表4 受講生の年度別・男女別内訳

年度	タイ			ミャンマー			ベトナム		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
1999	13	10	23	4	5	9			
2000	6	9	15	2	11	13			
2001	5	12	17	0	11	11			
2002	2	7	9	4	15	19			
2003	4	4	8	3	8	11			
2004	4	7	11	6	8	14			
2005	0	4	4	2	3	5			
2006	1	3	4	3	6	9			
2007	1	8	9	1	10	11			
2008	0	5	5	1	5	6			
2009	2	4	6	5	7	12			
2010				4	4	8	4	6	10
2011	1	8	9	7	8	15	2	9	11
2012	2	13	15	1	8	9	3	5	8
合計	41	94	135	43	109	152	9	20	29

渡航前の段階でこのような情報を受講生にどこまで伝えておくか、ということについては担当教員の間でも意見が分かれています。少なくとも受講生は渡航する国の状況を調べておく必要はある。引率教員も訪問先を選んだ理由や意義などを事前に指導しておくことが必要であると考えられる。

各渡航コースについて年度別の受講生数を表4に示した。当初はタイコースの方が多かったが、4年目の2002年以降はミャンマーコースの方が多い。また、2005年と2006年は受講生が減少しているが、これには2004年末に起きたスマトラ島沖の巨大津波の影響や、頻発するテロ、鳥インフルエンザの影響が考えられる。2007年は若干の増加が見られたが、2008年は再度減少している。2010年はタイコースの希望者が少なく渡航を中止した。これは渡航国の政治情勢の悪化が影響している。

受講生の男女別内訳については、1年目（1999年）に

表5 受講生の所属学部

	人数(人)	割合(%)
農学部	219	69
法文学部	33	10
理学部	18	6
医学部	14	4
水産学部	13	4
工学部	9	3
教育学部	8	3
歯学部	2	1
合計	316	

大学院は学部を含めた

はタイコースで男子の数が10名を超え女子の数を上回ったが、それ以外は女子の数が多。特に最近男子の受講が少ない。

受講生の所属学部を表5に示した。農学部が圧倒的に多く全体の約7割を占めている。これは、本講座の科目名に農業があるために、本講座が「海外で農作業を体験する講座」と勘違いされていることが懸念される。実際に農学部以外の学生から「農業の経験や知識が無くても受講できるのか」という問い合わせを受けることがある。シラバスを読めばこのような誤解は無いはずであるが、科目名だけで判断してしまう学生が居ることは確かである。一方、法文学部の受講生が多いのは、本講座が「国際協力」をキーワードに挙げていることが反映されていると考えられる。

参考資料

- 1) 谷口巳三郎 (2004) 熱帯に生きる～在タイ20年、農村開発に命を捧ぐ、国際ボランティア活動記Ⅱ～、熊日出版。
- 2) 谷口巳三郎 (2003) エイズ最前線 死の川のほとりからタイの若者を救え！（谷口巳三郎の国際ボランティア活動記Ⅰ）、熊日出版。